

2025(令和7)年度 特許情報普及活動功労者表彰

特許庁長官賞

【特許情報活用普及功労者】

株式会社シクロ・ハイジア 代表取締役 CEO

小林 誠

1. 受賞にあたって

このたび、令和7年度特許情報普及活動功労者表彰における「特許庁長官賞」という栄誉を賜り、誠にありがとうございます。まずは、評価をいただいた選考委員の皆様、並びに本表彰制度を長年にわたり運営し、日本の特許情報基盤を支えてこられた日本特許情報機構の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

知財情報の活用・普及という活動は、華やかな研究開発や技術革新の最前線と比較すると、ともすれば地道で、黒衣（くろご）のような役割かもしれません。しかし、膨大な特許情報の海から価値ある真珠を掬い上げ、それを誰もが活用できる形へと昇華させるプロセスこそが、我が国の産業競争力を根底から支えるインフラであると信じてまいりました。このたびの受賞は、私個人の活動に対する評価のみならず、これまで共に歩み、知財の重要性を信じて

研鑽を積んできた全ての同志、そして私の活動を支えてくださった多くの関係者の方々の努力が、公に認められたものであると受け止めております。これまで知財情報の活用・普及に向けて礎を築いてくださった先人の方々に敬意と感謝を表します。

現在、生成 AI の台頭やデジタル・トランスフォーメーション（DX）の加速により、特許情報を取り巻く環境は劇的な変革期を迎えています。情報の「量」が爆発的に増加する中で、真に求められているのは、その情報をいかにして「知恵」へと変換し、次なるイノベーションの種を見出すかという「質」の視点です。

本稿において、これまでの歩みを振り返りつつ、変化し続ける社会において特許情報普及活動が果たすべき真の役割とは何か、そして私たちが次世代に何を繋いでいくべきかについて、私なりの展望を述べさせていただきます。このささやかな記録が、知財の未来を担う皆様にとって、少しでも新たな気づきや糧となれば幸いです。

2. 特許情報普及活動の原点

前職のデロイトでの知財戦略コンサルティングサービスは、元々は米国チームが開発したプラクティスを日本流にアレンジして立ち上げました。米国チームでは、当時より特許情報を活用しながら特に大学の技術移転によるスタートアップを支援し、多くの成功企業を生み出すことに貢献していました。

私自身もその有用性やユニークさを感じ、「これは知財立国として日本で必ず必要になる」という確信を持って、実務に取り組んできました。また、シ



クロ・ハイジアとして独立した後も、知財情報の活用・普及を重視してきました。

今では、IP ランドスケープや、知財ガバナンスという考え方が普及し、知財情報の活用・普及が進んでいます。これらに、私自身の活動が微力ながらも貢献できているようであれば、とても嬉しいことです。

3. これまでの取り組みと成果

これまでの取り組みや成果を振り返ると、様々な業務に携わる中で、そのすべてにおいて知財情報を活用していることを再認識し、それが私個人としても弊社シクロ・ハイジアとしても、お客様に対する提供価値に繋がってきたと考えています。

本業のアドバイザーサービスとしては、大企業のみならず、全国の中堅・中小・スタートアップ企業まで幅広く支援をさせていただいており、経営・事業戦略、新規事業開発や実行に関するアドバイスを提供する中で、知財情報を活用してきました。

国や省庁での有識者委員として、内閣府、総務省、経済産業省、特許庁などの各種事業の研究会や委員会においても、知財活用・知財情報活用という文脈で様々な提言や意見をさせていただきました。

NEDO では、イノベーション戦略センターの標準化・知財戦略ユニットのフェローとして、政策立案とプロジェクト推進に貢献する NEDO 技術インテリジェンス機能の中核を担ってきました。

また、地方公共団体関係では、東京都中小企業振興公社知的財産総合センターにおける、「スタートアップ知的財産支援事業ハンズオン支援」で事業統括コーディネーターを務めており、スタートアップ企業に対して知財の重要性や知財情報活用の有用性を伝えてきました。

山梨県では、新事業チャレンジアドバイザーを務めており、「TRY!YAMANASHI! 実証実験サポート事業」や富士山科学研究所の「やまなし火山防災イノベーションピッチコンテスト」などに携わっており、ここでも、知財の観点を加えたアドバイス等を提供してきました。



株式会社シクロ・ハイジア 代表取締役 CEO
小林 誠

《プロフィール》

(沿革／経歴など)

国際特許事務所、大手監査法人、外資系大手 M&A アドバイザリー会社を経て現職に至る。

経営・事業戦略アドバイザー、M&A ファイナンシャルアドバイザー、知的財産戦略アドバイザーを専門とする。

製造業および ICT 業界における IP ランドスケープを中心とした事業戦略策定、新規事業開発、知財戦略策定、グローバル知財マネジメント、移転価格税制対応、知財組織体制構築、戦略人材育成、オープンイノベーション・ビジネスエコシステム構築・M&A・アライアンス支援等に従事。

官公庁・地方公共団体・大学・公的研究機関等の公的事業、中小ベンチャー・スタートアップ企業支援、地方創生・産業振興等にも携わる。

鮫島正洋弁護士との共著「知財戦略のススメ」を代表作に、「IP ランドスケープ経営戦略」等、著書・論文多数、「グローバル知財戦略フォーラム」でのモデレーターや、「IPBC Asia」でのスピーカーを務めるなど講演実績多数。

東京大学大学院 新領域創成科学研究科 博士後期課程単位取得後退学

令和6年度 経済産業省 特許庁「知財功労賞(特許庁長官表彰)」受賞

AIPE 認定 シニア知的財産アナリスト

特任教授 大阪工業大学 知的財産学部／知的財産研究科

客員教授 KIT 虎ノ門大学院(金沢工業大学大学院)イノベーションマネジメント研究科

客員フェロー 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)イノベーション戦略センター

専門委員 裁判所(知的財産権訴訟)

監事 一般社団法人デザイン経営推進機構

さらに、大阪工業大学では、特任教授として「知的財産情報検索分析要論」や「知的財産評価特論」などの講義を担当しており、知財を学ぶ若い学生達に特許情報活用の意義や面白さを伝えています。また、私の研究室やゼミ生も知財情報活用をテーマに研究を進めています。

KIT 虎ノ門大学院では、客員教授として「IP ランドスケープ要論」や「知的財産評価実務特論」などの講義を担当し、社会人大学院生に対して、より実務的かつ実践的な知財情報の活用について議論を深めています。

4. 特許情報を取り巻く環境の変化と課題

今後ますますデータ解析・活用の重要性は高まってきましたが、他方で AI 技術の発展により、大きな転換点を迎えています。

詩人 T.S. エリオット氏は、その詩の中でこう問いかけました。「情報のなかに失われた知識はどこにあるか。知識のなかに失われた知恵はどこにあるか。」現代が真に価値ある「知恵」を喪失していることを嘆いた言葉です。情報は体系的な知識へ、知識は人生や自然を包括する「生きた知恵」へと統合されず、断片化している現代の危機を指しているものと考えられます。

特許情報の普及活動とは、単なる「情報 (Information)」の提供ではありません。それを「知識 (Knowledge)」へと構造化し、最終的には経

営や技術開発を導く「知恵 (Wisdom)」へと昇華させるプロセスです。

現象学の祖と呼ばれる哲学者エドムント・フッサール氏は、「事象そのものへ! (Zu den Sachen selbst!）」と述べています。「先入観や理論を排し、対象そのものに立ち返れ」という意味です。この言葉は、情報の氾濫に直面する現代において、かつてない重みを持ちます。つまりは、「本質を見ることこそが直観である」という考えに基づき、単なる経験的観察ではなく、想像力を用いて対象を「自由変更」し、本質的特性を抽出することが重要となります。

特許情報に限らず、今のビッグデータ分析は、往々にして「相関関係」の抽出に終始しがちです。しかし、特許明細書の一行、あるいは出願統計の一点は、孤立した数値ではありません。その背後には、発明者が直面した技術的困難、企業の命運をかけた投資判断、そして社会課題解決に向けたソリューションという「実世界」や「ビジネス」の文脈が脈打っています。

単なる「データ遊び」に陥らないように、実務的な目的や課題を正しく認識し、そのためにどうデータを読み解き、活用していくかが重要です。膨大なデータをフィルタリングして「真珠」という宝物を見つけ出すだけでは、情報の普及活動としては不十分です。真に価値あるインサイトとは、真珠そのものではなく、その真珠を育んだ「母貝」の状態、すなわち時代の要請や技術的パラダイムなどの外部環境の動向を推察することから生まれます。データの裏側に潜む「見えない意志」を読み解くことこそが、情報に命を吹き込む知的行為だといえるのではないのでしょうか。

5. 今後の展望と次世代へのメッセージ

ここで、将来への新しい視点として、「知財情報の解釈学的転換」を提言したいと思います。

これからの知財情報普及活動は、検索精度の向上という「技術的競争」のフェーズを終え、いかにして情報の「コンテキストを接続するか」という「解



積の競争」へと移行すべきです。具体的には、以下の三つのパラダイムシフトを提唱します。

① 「点」から「線」、「線」から「面」、そして「層」へ

IP ランドスケープそのものと同義かもしれませんが、個別の知財情報の点（一次元）を時系列の潮流の線や技術的拡がりの面（二次元）として捉えるだけでなく、社会情勢や倫理観、地政学的リスクといった「市場情報」との多層的（三次元）な重なりの中で解釈する「レイヤード・インテリジェンス」を実装すること。

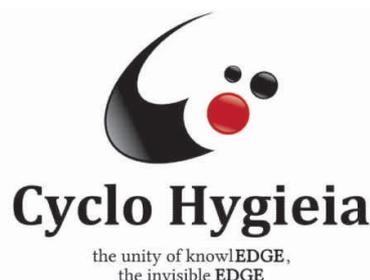
② 「客観」から「間主観」へ

「間主観」とは、独立した「個」の主観ではなく、他者と共有された共同的な主観のことです。つまり、データ分析を客観的な事実確認に留めず、分析者とデータとの対話、さらには異なる専門性を持つ複数の人間による「解釈の合意形成」を重視するプロセスを構築すること。

③ 「予測」から「予祝」へ

「予祝」とは、夢が叶っている未来を、前もって喜び、先に祝うことで、実現を引き寄せることです。バックキャスト（バックキャストリング）思考そのものとなりますが、過去の延長線上にある未来を「予測」するのではなく、知財を活用してどのような価値を生みたいかという「意志ある未来」を構想（デザイン）し、それを実現するための触媒として情報を機能させる仕組みを構築すること。

哲学者モーリス・メルロ＝ポンティ氏は、「世界は、私がそれについて持つ意識の中のみあるのではない」と述べています。同様に、私たちの知財情報分析がどれほど緻密で正確であっても、そこには常に「未知」の部分が残されています。情報の裏側にある人間の情熱、苦悩、努力、そして希望を汲み取ることが大事です。ビッグデータという冷徹な事実や数字の集積を、温かな「知恵の系譜」として次世代へ繋いでいくことが必要です。



そのためにも、私はこれからも、知財情報と向き合いながら知の深淵に挑み続けたいと考えています。知財情報が、単なる権利の証跡としてではなく、人類の進化を導く「羅針盤」となる未来を信じているからです。

6. おわりに

結びに際し、改めてこの栄誉を分かち合いたい方々がいます。迷いの中で共に議論を戦わせた同僚、厳しくも温かい示唆をくださった先達、そして何より、知財情報という一見無機質なデータの背後にある「発明者と知財関係者の情熱」を信じ、共に歩んでくださった全ての皆様に、心からの感謝を捧げます。

知財情報は、過去の足跡を記す記録であると同時に、まだ見ぬ未来を照らす「希望の光」そのものです。激動の時代にあって、私たちがこの情報の海に正しく航路を拓き、知恵として普及させていくことは、日本の、そして世界のイノベーションを加速させる揺るぎない力になります。

改めてこの賞の重みを噛み締めますと、喜びと同時に、身の引き締まる思いです。特許庁長官賞という名は、これまでの実績に対する「終着点」ではなく、これからの日本の知財情報の活用・普及をさらに加速させていくための「通過点」であり、「新たな出発点」であると考えています。

この賞に込められた期待を胸に、私はこれからも、知財情報が真に社会の共有財産として輝く未来を目指し、一層の精進を重ねてまいります。知財の力が、次世代を担う志ある人々の道を明るく照らし続けることを願い、受賞の言葉とさせていただきます。